

人間関係の学 The Study of Human Relations

渡邊 毅

WATANABE, Tsuyoshi

はじめに

わたしは、1987年4月、4年制大学の学部としてはじめて認可された大学の一つ、梶山女学園大学・人間関係学部の創設メンバーの一員で着任した。それまでの17年間は、京都大学霊長類研究所形態基礎部門の助手として研究三昧の日々を送っていた。専門は霊長類学・人類学であり、研究テーマは〈ホミニゼーション〉（サルからヒトへの進化）だったが、具体的には新世界ザルの進化とニホンザルの小進化（地域変異の研究）、スラウェシマカクの種分化の研究に従事していた。どちらの研究もフィールドワークを主眼としていた。

霊長類研究所にはさまざまな分野の研究者が参集していたが、大きくはフィールド系と実験系に分かれ、お互いの価値観を異にしていた。しかし、同じ霊長類を研究対象とし、〈進化〉というキーワードを共有する方向性のなかで、意見は違ってもある種の一体感も産まれていた。

このような研究歴のわたしが人間関係学部の教員になったのだ。担当科目は教養の人類学だ。教養と外国語・体育の担当者は、一般教育等共同研究室に集った。個人研究室で過ごす時間より共同研での議論や世間話で費やす時間の方が長かった。霊長研での議論は専門的ではあったが、まったく異なる分野の研究者との議論は、初めての経験でありすごく刺激的だった。一般教育等の主任は、名大水研をリタイヤ後に赴任された北野康教授で化学担当、物理学

は同じく名大組の福井崇時教授、その他にも名工大のリタイヤ組の体育担当教授や心理学担当教授、愛知県立大学からの国文学担当教授が長老グループを形成し、わたしは若い方の教授だった。一般教育等に属する専任教員は14名を数えた。

新設学部の場合、2年間はあまり専門領域の専任教員の出番は多くない。したがって、教授会での学部運営にかかわる問題にも、一般教育等の教員が大幅に関与することになった。旧大学設置基準に従って提出された設置申請書をすべての専任教員が共有していた。人間関係学部の設置目標として、学際的研究の遂行と教育が、そこには謳われていた。

そもそも、1960年代末から1970年代前半の大学紛争を経て文部省（現・文部科学省）は学部改革に乗り出し、学際性を売りにする学部が新設されていたのだが、人間関係学部は大阪大学の人間科学部をモデルとして構想されたものだった。人間科学部は文系・理系の学科を数多く含む大規模な学部だったが、私立大学の身の丈に合わない。そこで、心理学・社会学・教育学の3専攻を柱とする人間関係学部が認可されることになった。

梶山女学園大学では、当初専攻を設けないより学際的学部の構想で申請したところ、文部省の指導で、人間関係学部を名乗るからには3専攻が必要条件だとされ、申請し直したことを当時の設置者から聞いている。そこで梶山女学園大学では、3専攻という3本柱を基礎で支え、なおかつ独自の領域としても

う1本の柱を建てることで学際性を担保しようと試みたのだ。

学部の必須専門科目として1年生から〈人間科学〉という重要科目が用意された。この科目はⅠからⅣとナンバーを付し、すべてが必修だった。Ⅰは〈人間学的研究〉、Ⅱは〈心理学的研究〉、Ⅲは〈社会学的研究〉、Ⅳは〈教育学的研究〉との副題がつけられた。わたしは、〈人間科学Ⅰ〉の担当者でもあった。そして、〈人間関係学〉とは何かを自らの追究課題とするようになったのだ。

囲りの研究者たちに、〈人間関係学〉についての見解を聴取していったところ、満足のいく返答はなかった。〈人間関係学〉という学問がすでに存在しているとの見解は皆無だった。〈人間関係学〉など存在していないし、そもそも〈関係〉が学になり得るのかとの根源的疑義も発せられた。比較的多くの人の意見で、また無難と思えたものは、今はないがこれから学部での活動を通して創り出す学問だ、との見解だった。これはよくある問題先延ばしの議論だったようだ。

フレッシュな新入生を前に、「人間関係学部への入学おめでとう。これから4年間、人間関係について学ぶ皆さんに言っておきたいことがあります。人間関係学という学問は存在しません。」と言って講義に入るわたしは、まるで詐欺師ではないのか。学部での議論も低調となり、人間関係学はいつまでたっても輪郭さえ見えてこない。創設から2クール（大学は4年間を1クールとして動いている）が経過した段階で、もがきながら『私的人間関係学序説Ⅰ～Ⅳ』を4年間にわたって大学の研究論集に執筆したのだった。これは、あくまで序説の域を脱していないが。

今回、第8回総合人間学会シンポジウム『人間関係の新しい紡ぎ方—3.11を受けとめて』にコメン

テーターとして招かれたのを機に、長年考えてきた〈人間関係の学〉についての私見を開陳したいと思う。

人間関係原論

人間関係とはどのような概念なのだろうか。日本の霊長類研究者たちは、フィールドでの観察からニホンザルの個体間関係さらには社会関係を追究していった。誰が見ても明白な関係は母子関係だ。かつて、世界で最初に野生チンパンジーの餌づけに成功したイギリス人のJ・グドールは、「チンパンジーには母子関係以外の社会関係は存在しない。」と報告した。しかし、京大の伊谷純一郎とその門下生西田利貞・川中健二は詳細な個体間関係の追究から、チンパンジーが非母系（父系型）の社会構造をもつことを解明した。

ニホンザルの研究は、当初オス同士の強弱、順位関係に着目し、オトナオスの間に線形の順位が存在することを明かした。順位下位のオスは上位のオスの前では遠慮して振舞う（出会ったとき優位オスの尾は立っているが、劣位オスは尾を下げる）。順位の優劣を判断するのは簡単で、2個体の中間にピーナツを置くと、どちらかが100%手にする。取った方が優位、取れない方が劣位と判断できる。ニホンザルでは、個体間関係の総和と、群れ全体の動きから、社会構造が解明されていったのだ。

人間関係を考察する際のわたしの立場は、哺乳動物・霊長類の進化と系統関係を軸足とするものだ。サル（ニホンザル）の個体間関係の延長上に人間関係が位置づけられる。つまり、生物学を基盤として考えようとするものだ。そこでは人間関係の基本軸を二つ定めることができる。軸の一つは個体発生、もう一つは系統発生だ。生物学においては、19世紀後半のヘッケル以来、個体発生と系統発生の関係が論じられてき

た。生物の進化においては、どちらも等しく重要なのだ。ここからは、二つの軸について考察を進めていきたい。

個体発生の軸（母子関係）

人間は霊長類の一種であり、哺乳動物に属する。したがって、個体発生は哺乳動物の様式を受け継いでいる。受精卵はメスの子宮に着床し、一定期間の妊娠の後に新生児として娩出される。新生児は母乳によって育まれる。母子関係がどのような人間においても例外なく人間関係の出発点になる。

母子の絆の重要性は、心理学においても指摘されてきた。ボウルビーの〈愛着理論〉だ。ボウルビーは、親に遺棄された子供たちの精神発達を研究していた。そしてある論文と出会い、〈愛着理論〉を形成することになる。彼が出会ったのはハーロー夫妻によるアカゲザルの隔離実験の論文だった。ハーロー夫妻の実験は多岐にわたるが、有名なものの一つに、針金人形とぬいぐるみ人形の代理母と乳児の関係を追究したものがある。アカゲザルの隔離乳児はミルクを供給してくれる針金代理母よりもぬいぐるみ代理母に愛着を示す。ボウルビーは、その論文からアタッチメント（スキンシップ）の重要性を認識し、理論化したのだった。

母子のスキンシップの重要性が、人間関係の原点を形成し、そこから関係のネットワークが拡大していく。父子関係が加わり、兄弟姉妹関係が加わり、親族関係に広がり、遊び仲間の関係から友人関係が形成される。人間関係は複雑化の一途をたどるが、あくまで原点は母子関係なのだ。

ただし、アカゲザルの隔離実験が象徴的に示すように、愛着は代理母との間にも形成されることから、母子関係の条件は必ずしも血縁に限られてはいないだろう。大事なものはスキンシップだ。

系統発生の軸（性関係）

生物の進化は、単細胞から多細胞へと複雑化をなしとげた。多細胞生物の登場は、地球生命圏において、画期的だった。二つの性が確定したのだ。卵子と精子が受精することで次世代が形成される。子は親の完全コピーではない。ここから生物の多様性が現出することになる。

多細胞生物の活動は、個体維持と種族維持に分けて理解することができる。種族維持のためには性関係が必要となる。霊長類では、他の哺乳類にくらべ、成長期間が長い。性成熟までの期間を目安にすると、ニホンザルでは4～5年、チンパンジー・ボノボでは9～11年、ヒトでは11～13年くらいだ。性成熟に達したからといってすぐに社会的オトナとみなされるわけではない。メスの場合、子供を産むことでオトナ社会に参入するが、オスの場合、さらに複雑な個体間関係を処理することでオトナへのステップをきざんでいくのだ。

生物学的視点からすれば、長い成長期間はすべて種族維持のための準備期間と断定することもできる。このような見方は、新たに登場した社会生物学的視座と呼ぶことができる。社会生物学の議論は、いかに多くの子孫を残すかという点に集約される。そこでは、コストとベネフィットという変数を入れた繁殖戦略という概念が使用される。

社会生物学は、昆虫の個体間関係や性行動の分析で大成功をおさめた。哺乳動物の行動分析へもある程度運用できるかもしれない。しかし、霊長類の行動の一部、たとえば子殺し行動の分析には応用できなかったものの、全体的にみると、あまり成功しているようには思えない。

ここで強調しておきたいのは、社会生物学的文脈に乗るかどうかは別にして、生物学的視点が重要であるとの指摘だ。わたしは、人間関係を考えるとき、

生物学的立場から、二つの基本軸を提唱した。そこで、3.11 以後の人間関係で注目すべき問題を考察することにする。

3.11 以後

3.11 を検討する方法は、以前と以後で何が変化したのかを追究することだろう。被災地においてはこの変化は明白だ。変化を元の状態に戻すのは復旧であり、新たな展開も含めて未来の町づくりを目指すのが復興だろう。3.11 以後の困難は、ツナミ被災地での復旧にとまどいがあり、住民の総意に基づく復興のヴィジョンが見えない点にある。さらに、事態を複雑にしているのは、原発事故被災地とツナミ被災地が重なっている点だ。原発被災地には復旧も復興もない。このことを政府はひたすら隠し続けている。チェルノブイリで明らかなように、35km 圏内は 100 年のオーダーで人は住めないのだ。

被災地の復興は大問題ではあるが本稿では、被災地以外で見られる変化について述べてみたい。都会において結婚に走る女性が増加しているとの報道があった。異常事態に遭遇したとき、人は恐怖や不安にさいなまれる。独身生活を謳歌していても、あくまで平時の生活様式のなかでだ。非常時に際して、人はどう振舞うのか。文明の虚飾をはぎとったとき、人は原初的感覚をよみがえらす。非常時に自立は通用しない。不安なとき、人は誰かに頼りたくなる。心理的な説明を多くの人が納得するだろう。

しかし、さらに根源的な解釈はできないのだろうか。例としてふさわしいのかどうかには問題はあると思うが、アメリカ産婦人科学会誌で発表された論文を検討してみよう。1976 年の論文だったと記憶しているが、手元にコピーがないので不正確だ。内容はレイプ被害女性の有意に高い妊娠率についてだ。結論として突発性排卵が招いたものとみなされる。

突発性排卵が危機的状況、あるいは恐怖・不安な心理と関連するのではないか、というものだった。

世間の噂で流布しているものに、かつてニューヨークで大停電が起きたとき、翌年の出生率が増加したというのがある。文明が作動しなくなったとき、人は寄り添って時を過ごすことになる。

2012 年の出生率は 2011 年より増加している。ここには危機を体感したときの人間の動物的反応が読みとれるのではないか。新たな人間関係の紡ぎ方と見るか、古い人間関係のよみがえりか、わたしには後者のように見える。

3.11 とは、人間の文明の問題ととらえることもできる。電力エネルギーに依存する生活に慣れ切ってしまった人間に、一瞬立ち止まって反省する時間を与えてくれたのかもしれない。すべてを金に換算してしまう近代の人間関係への反省でもあると思う。ネット社会の人間関係が今後どう展開するか、まだ不明な点が多いけれど、アタッチメントのない人間関係に持続性はないだろう。

わたしには、新しい人間関係の紡ぎ方と見るよりも、危機にひんしたときは原初的關係の方が必要なのだ、と見えてしまう。古い人間関係（家父長制度や伝統的家族制度を意味するものではない）の価値を見直し、そのうえで、ネット社会での人間関係の新しい紡ぎ方を模索してはどうだろうか。これが目下のわたしの問題意識であり、コメントとさせていただきたい。

渡邊 毅（梶山女学園大学名誉教授）